

東洋紡株式会社 2022年度 第3四半期決算説明会 質疑応答要旨

日時：2023年2月9日（木） 10:30～11:30

場所：WEB形式

説明者：代表取締役 専務執行役員 管理部門統括 大槻 弘志

本資料中の将来の業績見通し等に関する記述は、現時点における情報に基づいており、当社として保証するものではありません。実際の業績等は、さまざまな要因により異なる可能性があります。

Q：「コスモシャイン SRF」の3Qの実績、4Q以降の見通しは？

A：2Q時点は、1Qに対し2Qは70%、3Q80%、4Q90%と見通していたが、3Qは、1Qに対し80%以上の回復となった。ただし、4Qは反動で販売減となる見通しであり、通期では2Q時点の見立てと大きくは変わらない。販売は、パネルメーカーの稼働率に影響されるが、23年度に入れば数量は回復すると見込んでいる。

Q：セラミックコンデンサ用離型フィルムの3Qの実績、4Q以降の見通しは？

A：1Qに対し、2Q、3Qと販売が減少している。スマホ市場の回復に影響され、4Qはまだ厳しい状況が続く見通し。23年度下期あたりから改善すると見込んでいる。

Q：セラミックコンデンサ用離型フィルムは、スマホ市場に影響されるとのことだが、スマホ用途と車載用途で、どちらを多く扱っているのか？

A：厳密にはどの用途に使われているかは把握しきれていないが、スマホ用途の方が多くなっている。

Q：製品値上げについて、工業用フィルムと包装用フィルムのどちらが取りこぼしが大きいか？

A：工業用フィルムの方が、価格転嫁率は低い。

Q：モビリティは減益だが、エンジニアリングプラスチックとエアバッグ用基布の状況は？

A：前年同期比ではエアバッグ用基布よりも、エンジニアリングプラスチックの減益幅が大きい。原燃料価格高騰に対して価格改定が遅れていることと、海外での加工費UPによる影響が大きい。

Q：PCR検査用試薬の3Q累計実績、4Q以降の見通しは？

A：3Qは新型コロナウイルス感染症の第7波、第8波を受けて、3Q累計の売上高は昨年度を上回っている。ただし、4Q以降は、PCR検査から簡易検査の抗原検査に移行が進むこと、加えて2類感染症から、5類感染症に移行することより、販売は減少する見込み。そのような背景で、23年度の販売は22年度に対して大幅に減少する見込み。

Q：石炭価格が足元下がっているが、業績に反映されるまでの期間はどのくらいか？

A：足元の石炭価格が業績に反映されるのは、半年後くらいと見込んでいる。

Q：棚卸資産が多くなっているが、適正在庫をどのように考えているか？

A：事業によって適正在庫月数は異なるが、全社で平均すると、3 か月後半から 4 か月程度と考えている。
現時点では、異常在庫月数にはなっていない。

以上